

札幌市立星置中学校の取組

1 研究のねらい

これからの社会では、国際的な視野をもち、広く世界で活躍する力を育てる必要がある。そのためには、まずは自国に興味をもち、自国のよさを理解することにより、他の国にも目が向けられると考えた。

事前アンケートでは「日本が好き・わりと好き」という生徒が 89% もいる。理由としては「治安がいいから(平和・安全)」「水や食べ物が安心・おいしい」などが挙げられた。しかし、「他の国に自慢のできるもの」としては多くの生徒が「着物」「和食」と挙げながらも、実際には、洋服を着て、和洋折衷の食事を取って生活しており、和文化を中心と生活しているわけではない。そこで、日本の民族衣装である和服を取り上げ、日本のよさについて理解することをねらいとして本研究に取り組んだ。

2 取組内容

課題：「日本のよさ」を理解し、日本の伝統文化を大切にする姿勢を育成するためには、どのような授業が有効だろうか。

(1) 事前の取組

① 民族衣装と和服

様々な国の民族衣装について調べ、たくさんの国や民族が独自の衣装をもっていることに気づき、日本の民族衣装に目を向けるようにした。

② 和服の成り立ちと現在残っている和服文化

和服の歴史を学習しながら「和服」=「着物(着る物)」と「洋服」=「西洋の服」の呼称について気付いた。また、現在見る和服を挙げていく中で、「成人式」「結婚式」などの特別な時や「歌舞伎」「落語」などの特別な職業だけではなく、「浴衣」「産着」「柔道着」など、日常の生活の中にも和服の要素が取り入れられているものが多いことに気付いた。

③ 和服と洋服のイメージ

和服と洋服の特長を班で話し合い発表した。洋服は「着やすい」「楽」「組み合わせが自由」「おしゃれ」などの長所がたくさん挙げられた。和服は「美しい」「日本の伝統文化が感じられる」「清楚」「高級」などの外見からの特徴ばかりが挙がり、実際に着たことがないことがよく分かる感想であった。和服の短所としては「着づらい」「重い」「動きづらい」「暑い」「苦しい」「高価」などマイナスのイメージで挙げている生徒が多く、和服を着ることは大変だと思っている生徒が多い。この生徒のイメージを次に記載する日本時代衣裳文化保存会の講師に事前に伝え、このイメージを踏まえて体験授業を行った。

(2) 和服の体験授業

日本時代衣裳文化保存会の協力を得て「和服の授業」を行った。「和服の授業」とは、

単に着付けだけではなく、広く和服の歴史・よさ・生活文化などの講義と和服を自分で着ての礼儀作法の体験などを通して日本のよさを見直すことを目的としている。

① 日本の文化と和服の歴史

和服の素材である絹が蚕の命をもらってできていることから、命や思いやりを尊重した気持ちが日本の文化の底に根付いていること、和服を何代も受け継ぎ物を大切にする姿勢や相手を敬う礼儀作法、靴の揃え方などのマナーなどを知り、日本の伝統文化の素晴らしさに気付いた。

② 着付けと礼儀

和服の中でも最も簡単で身近な浴衣の着付け体験を行った。最初は戸惑いながらも、全員が自分の力で着付けをすることができ、お互いの姿に喜ぶ姿が多く見られた。体験後の生徒の感想では「意外と簡単に着ることができた」「軽い」「涼しい」「動きづらくない」「背筋が伸びて気持ちが引き締まる」「かっこいい」など、体験前のマイナスのイメージが一掃された感想がたくさんあった。

また、この体験に ALT も一緒に参加し、感想を生徒に伝えた。「アメリカは大きな伝統がありません。なぜなら、(建国から) まだ 300 年も経っていません。多くの外国人が日本の着物が本当に素晴らしい日本の一面であると思っています。日本人がうらやましいです。」この言葉を聞き、日米の伝統や文化の違いを改めて実感し、他の国についてもっと知りたいという動機付けにもつながった。



(3) 和服の体験から自分の生活に生かせること

今回の体験を日常の生活にも生かすことができないかを考えた。「衣服を大切に扱い、長く使っていくのはもちろん、何事にも感謝の気持ちを大切にしていく。」「思いやりの気持ちを大切にし、あいさつやマナーをきちんとする。」「普段から姿勢を正しく。」など、この取組を通して、多くの生徒が日本文化の根底にある大切なものを学んだ。

3 成果と課題

(1) 成果

この取組を通して、和服に興味をもち、身近に感じた生徒が多い。自国の文化を大切にしていきたいという感想を書いた生徒が多くいたが、他の国の評価(ALTの言葉)が、「日本ってすごい」という考えを後押ししたようである。今回、和服の授業を和服ということだけで終わらせず、日常の生活の戻したことが、日本文化の根底にある日本の心(思いやり・物を大切に作る心など)にまで気付くことができ、大きな成果が得られたと感じている。

(2) 課題

今回は技術・家庭科の授業の一環として研究を進めたが、英語科や社会科など他の教科と連携を取りながら研究を進めることで、生徒にとって理解が更に深まり、国際理解の素地を育成することにもつながっていく。